

子どもと女性の健康相談室

96



福島医大ふくしま子ども・女性医療支援センター長

高橋 俊文氏

「卵子凍結」という言葉を皆さんはご存じでしょうか。卵子凍結は、女性が将来、妊娠・出産する可能性を残す方法です。

歳以降に妊娠する力Ⅱ 妊孕性(にんようせい)Ⅱが下がり始め、40歳で急速に低下します。現在、パートナーがいないが将来妊娠したい

は社会的適応による卵子凍結(社会的卵子凍結またはノンメディカルな卵子凍結)と呼ばれており、がん治療などによる妊孕性低下に

妊娠の可能性を残す

卵子は女性の卵巣内にありますが、卵子の数は年齢の増加に伴って減り、50歳でほぼなくなり、新たに作られません。一方、男性の精子は生涯にわたって作られます。女性は35

い女性、パートナーはいるが何らかの理由で妊娠・出産をためらっている女性にとって、「卵子凍結」は将来の妊孕性を確保する方法となり得ます。このような卵子凍結

対して行われる医学的適応による卵子凍結(医学的卵子凍結)とは区別されます。卵子凍結の方法は、不妊治療で行う体外受精治療に準じます。卵巣から多くの卵子を採取するために、排卵誘発剤を用いて採卵手術を行います。採取した

社会的卵子凍結

もに液体窒素のタンクに保存されます。日本産科婦人科学会は、妊娠・出産を意図的に遅らせる社会的卵子凍結を推奨しています。また、卵子凍結には、排卵誘発剤の副作用や採卵時の合併症があること、凍結卵子を用いた治療では必ず体外受精が必要であり、現時点では治療の成功率は高くなるといいますが、事前に十分な情報提供を受けてから実施することが必要です。東京都市は2023(令和5)年度から、都内に住む18歳から39歳までの女性を対象に、社会的卵子凍結に関する助成金制度を開始しました。社会的卵子凍結の先進地域である欧米のデータによると、実際に凍結卵子を用いて治療した女性は全体の1割程度であることから、日本でも実際に使用されない凍結卵子が増加する可能性があります。

Ⅱ

Ⅱ